

美術鑑賞を柱にした無言館の学習

高松 智行

(横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校教諭)

1. はじめに

戦争を知らない世代が総人口の約8割を占め、戦争体験の風化が課題となる昨今、戦後生まれの教員で構成される教育現場においては、リアリティのある平和教育を実践することがますます難しくなっている。さらに多忙な日々の中で、平和教育を体系的に取り組む機会は少なくなり、必要性を認識しながらも映像教材をとおして「かわいそう」や「戦争は悪い」といった子どもの感想を交流するにとどまった予定調和の授業が多いのではないだろうか。これらの感想は学習をしなくても誰もがもてるものであり、大切なのは、遠い過去に起きた戦争を追体験せずとも、いかに戦争体験者の実感にまで近づくことができるか、そしてその学びが一過性のものではなく、日常生活の中に確かに生きているか、である。つまり現代の教育では、みえないはずの戦争のリアリティをみることができ、その経験が将来にまで実感として残る授業が求められているともいえる。この「みえないものをみる力」は紛れもなく「想像力」であり、この「みる力」を育むことが使命である美術教育をとおして平和教育の課題が少しでも克服できるものと考え。

本稿では、筆者が2007年度に6年生を対象に試みた戦没画学生慰霊美術館「無言館」の授業をもとに、作品鑑賞をとおして戦没画学生のリアリティにより近づいていく子どもの姿とともに、中学生になった現在、彼らの中で無言館の学習がどのように整理され、実感として残っているのかを探りながら、平和教育における美術教育の有用性を述べたい。

2. 鑑賞の時間



神奈川県立近代美術館にて (2006年9月)

2006年度担任した5年生のクラスにおいて卒業までの2年間「鑑賞」を柱にした学級経営を試みた。答えが一つではないことを前提に、様々な価値観を共有できる「鑑賞」が学級を経営する上で有用と考えたからである。当初の子どもたちは日々の学習や行事に追われ、また「自分と対峙する力」「発言する力」「共感する力」に課題もあり、クラスの活動が停滞していた。特に話し合い活動では、声の大きい子の価値基準のもと、不信感を前提にしたコミュニケーションしか成立しない状況があった。

実践では週に1時間「鑑賞の時間」を特設し、まず子どもの関心にそって作品に描かれたものを「みつける」ことから始めた。続いて、それぞれの関係性や色やかたちの造形性から物語を「想像する」、そして仲間との対話から自分なりに「解釈する」という流れで「みる」ことを深めていった。また、鑑賞への関心が高まるにつれ、本校に隣接する神奈川県立近代美術館へ展示が変わるたびに出かけた。学校とは異なる環境下での実作品との対峙は、子どもたちに特別な緊張感の中で「ひとりになれる時間」をもたらした。そこに求められた答えはなく、安心して作品と対峙して考えを深めることができた。「本物は大きさも色も全く違うから、ひろえる言葉も全然違う」とつぶやく子がいたように、毎回ワークシートは想像した物語や仲間との対話の中から生まれた自分の解釈で埋まった。自分の考えをもつことで自信をもつ。その自信は仲間との差異を否定するのではなく、共感することにつながった。共感することでさらに自分の考えが広がり、対等に意見交換する姿も出てきた。

1年後には「鑑賞」の効果が明確に表れた。日々の授業や行事においてもクラスの活動が円滑に運ぶようになったのである。それは鑑賞同様、何事も答えは一つではないという認識で話し合いが進められるようになったからであり、一人ひとりが自分の考えをもって仲間と共感しながら新しい価値を見出すことができるようになったからである。

それまで鑑賞教育の実践経験がなかった筆者にとっ

て、子どもの変容は一つの着地点として満足できるものであり、次年度も同じ方法で継続して取り組む気持ちでいた。しかし、作品を変えながらもただ自由な解釈を楽しむだけの鑑賞学習は、物足りないものとして、学習意欲をそれ以上高めることにはつながらなかった。子どもたちは、作品に描かれたものから物語的内容を読み解くという意味での「みる」授業から、作品を「みるのが深まる」授業を求めているのだろう。

3. 無言館の時間



無言館訪問の様子 (2007年7月)

(1) 6年生1学期

6年生ではある子どもの提案で、5年生から継続して取り組んでいる神奈川県立近代美術館での鑑賞学習と沖縄の文化や戦争に関する学習から、長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」の学習をすることになった。導入では、画学生・伊沢洋が出征前に描いた「家族」という作品を鑑賞した。裕福で幸せをかたちにしたような作品から、子どもたちはいつものように言葉をひろった。しかし、無言館館主・窪島誠一郎氏の著書を読む中で、作者の空想画だということを知る。「貧しい農家でありながら必死で自分を東京美術学校に入学させてくれた家族をせめて絵の中だけでも…」そんな作者の思いを感じとった。「僕は絵が、一つ一つの背景を知ることによって大きく変わっていくことを学びました。」(T.G) という感想が出てきたように、子どもたちは作者や時代背景などの情報を得ることも鑑賞する上で大切であることを実感した。この見方の深化は、自由な解釈で終える鑑賞に飽きが見えていた子どもたちの意欲を再び高めた。しかし、「画学生がかわいそう」、「みんなで千羽鶴を折って無言館に届けたい」という感想を交流し、学級活動において安易に千羽鶴づくりが始まるなど、平和学習

としては予定調和になりつつある状況から、新たに鑑賞学習の課題を設定する必要性が出てきた。それは、画学生の作品鑑賞の中で想像力を働かせることにより、遠い過去の戦争と現在自分が生きる日常との距離を縮め、「だから戦争はよくない」という実感をつかみ、共有することであった。

1学期は、作品に表されているものと画学生や時代の背景を手がかりに表現意図について解釈する鑑賞を繰り返した。また鑑賞と並行して、窪島氏の著書で画学生や時代の背景、無言館設立までの経緯を丁寧に読み進めた。子どもたちは、学習を重ねる中で実作品をみたいという思いを募らせ、夏の宿泊学習で無言館訪問を計画した。しかし、十分な議論もないままに始めた千羽鶴づくりは、雑につくってしまう子、手よりも口が動いてしまう子など、子どもたちの意識をバラバラにする。宿泊学習直前に有志で完成はさせたが、「一部の人の気持ちで完成させた千羽鶴は意味がない」と持っていけないことを決める。千羽鶴なしの無言館訪問ではあったが、時間をかけて学習してきた無言館に自分たちの足でたどり着いた事実は、子どもたちの鑑賞意欲を大いにかき立てた。しかし館内では、実作品の色味や質感、筆跡、生々しく剥がれ落ちた絵の具、朽ちた画布など、画集やプロジェクターで投影した複製画では全く実感できなかった画学生や歴史の痕跡に言葉を失い、いつもはたくさんの言葉で埋まるワークシートも空白が目立った。以下は子どもたちの感想である。

- ・無言館の中に入るとなんだか張り詰めた感じがしました。作品の前に立つと作品に押されている感じがしました。(S.K)
- ・無言館に入った瞬間、空気に乱れがないことに気づき、とてもきれいな空気が入ってきた。無言館の外の空気もきれいだったけど、中はそれをはるかにこえる空気だった。(R.S)
- ・何か思っていたものと違う。いつもみたいに文章が進まない。詰まるって感じ。でも何も感じられなかった訳ではなく、絵から発しているものが大きすぎたから思うように感じられなかったのだと思います。(S.H)
- ・言葉を書くと何かが壊れそうな気がした。(S.K)

現代は印刷技術の発達やパソコンの普及により誰もがみたい時にみたい作品を容易に入手でき、美術館に足を運ばずとも目にすることができる。しかし、無言館での実作品との対峙は、学校で画学生や時代の背景を知り、深めていたはずの鑑賞が「実作品から感じる」ことには及ばないということを実感することとなっ

た。無言館訪問で学習を終えるつもりでいた子どもたちは、安易につくった千羽鶴と画学生の実作品を比較することにより、自分と画学生の間にある大きな乖離がみえたのだろう。2学期以降も学習を継続する意欲をみせ、次のような感想を残していることから、美術館へ出かけ、実作品と対峙することがいかに大切かわかる。

- ・何もかもが中途半端。千羽鶴も、戦没画学生に感じた気持ちも、作品に感じた気持ちも。今の状態じゃ終わらせてはいけなし、画学生に失礼だと思った。(S.H)
- ・画学生の本気の絵に千羽鶴が合わない、と思いました。持っていなくて本当によかったと思います。(S.M)
- ・千羽鶴はやはり持ってこなくてよかったと思いました。無言館の絵をみて、自分たちの作った千羽鶴と画学生の絵を並べた時に、千羽鶴は紙くずみたいに見えるだろうと思いました。(S.K)
- ・私は画学生が描いた絵を見てると、画学生は絵の中で生きているということが分かりました。＜中略＞なぜ無言館に千羽鶴をもってこなくてよかったかという、画学生は絵の中で生きているのに千羽鶴をもってくるのは「ダメ」だと思ったからです。(M.H)
- ・千羽鶴や短冊は思いつきだった。何も考えずに物事を行うということはいかに恐ろしいことかわかった。戦争も同じように「土地や資源がほしい」という思いつきだ。(T.I)
- ・やりたい、やりたくないではなく、2学期も学習を続けるべきだ。(R.O)

(2) 6年生2学期



窪島誠一郎氏の特別授業（2007年12月）

夏の無言館訪問を機に、子どもたちの中から鑑賞学習が「図工の時間」であるという意識が抜けていく。入り口は「図工の時間」であっても、館主の著書で画学生の背景を知った時間、太平洋戦争について学習した時間、自分たちの学習が中途半端だったと実感した

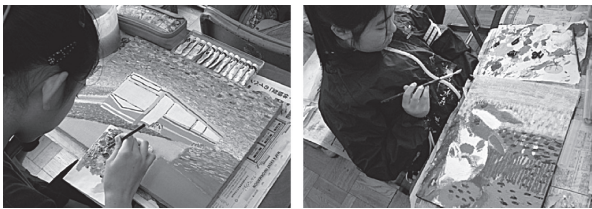
無言館訪問など、「みる」ことの質を深めていくうちに、学習が図工という教科の枠内で収まらないことに気づいた。2学期は、「無言館の時間」として再び画学生の作品鑑賞を継続しながら、その中で生まれてきた思いを整理し、窪島氏に手紙を書くことが学習の柱となった。以下は手紙から一部抜粋したものである。

- ・もし自分が戦争で死んでしまったら、家族が死んでしまったら、僕はまだ画学生がもっている「強さ」をもっていません。だから、画学生のような「強さ」を持てるようになりたいです。(T.G)
- ・戦争で死んでしまった画学生は「かわいそうだ」「不幸」と思っていました、生きている間に自分の生きた証を残すことができなくて幸せなのかもしれない。そして画学生たちが描いた絵は今も生き続けていると思いました。(A.I)
- ・有名で高価なものだけが人を感動させるのではない。気持ちが入っているかどうか全てだと思います。(A.N)
- ・無言館を訪れてみて、改めてここに千羽鶴を持ってこなくてよかったと思いました。絵を見て、遺品を見て、記憶のパレットを見て、戦没画学生のあの時代でも強く生きた気持ちに、私が折った鶴は全く達していないと思ったからです。＜中略＞半年近く続けた無言館の学習の中で私が感じたことは、画学生の、あの時代でも強く生き抜いた気持ちをまっすぐだとすれば、私の気持ちは曲がっていると思いました。無言館の学習をしているうちに、自分が戦争にあったときに画学生のような気持ちで死と向き合えるかどうか、と思い、とてもできないと思ってしまうことがあります。(S.H)
- ・これから生きていく上で大切にしたいものは、「身近なもの」です。身近な家族、友達、自分の宝物、自然、そんなものを大切にしていこうと思います。そして、窪島さんに約束するならば、「幸せな家族をつくること」しか約束できません。もちろん「将来なりたいもの」はあるけれど、なりたいものになれるとはかぎらないし、きっといくつも「道」がでてくるから、今は「幸せな家族をつくる」しか約束できません。(S.K)
- ・私は夏休みになって家族ともう一度無言館に行きました。母は言っていました。「あなた達がこれだけ無言館の学習をやっている意味が分かった」と。私はその時、「ぜひ窪島さんへってお話を聞きたい」と思いました。(M.H)

半年間学習を積み重ねてきた中で、子どもたちの「みる」が、画学生の作品を「みる」から画学生の思いを「みる」、そして自分自身や身近なものを「みる」へと深化し、ただ「かわいそう」な対象であった画学生から「強さ」や「幸せ」を見出すまでに変容していることがわかる。

この手紙が縁をつなぎ、学期末には窪島氏を学級に招き、特別授業が実現した。窪島氏は、2年間取り組んできた「鑑賞」の大切さを説くとともに、「才能がなくても、画学生のように情熱をもって何かに取り組むことはみんなにもできる」と卒業を迎える子どもたちに言葉を残した。この出会いを機に子どもたちは図工の集大成である卒業制作に意欲を高めた。

(3) 6年生3学期



卒業制作に取り組む様子 (2008年1～2月)

卒業制作では画学生同様、画布に自分の「原風景」や「大切なもの」を描く課題に取り組んだ。画材は重ね塗りができ、納得いくまで何度も描くことができるという理由でアクリル絵の具を選択した。これまでの無言館の学習や新しい画材との出あいは子どもたちから十分に表現欲を引き出したが、描き始めて間もなく、自分の「原風景」や「大切に思うもの」について悩み始める。続いて色や筆づかいなどの「描き方」、そして「自分らしい表現」と、描くこと約20時間、普段の楽しい図工から一転、苦悩しながら少しずつ納得のいく表現に近づけていった。以下は描き終えた子どもたちの感想である。

- ・何を描こうかな?多分これが描き始めてのひとことだろう。これ描こうかなって思った風景は何個もある。しかし、これでいいのか?と自問自答したことが何回もあった。最初の方は色遊びをしていた。僕は描きたいもの、風景が決まったら描こうとしていた。それまでは色遊びをしていようと思っていた。
<中略>今でもなにやってんのオレ?と自問自答している。本当にこれでいいのか?などと自問自答したこともある。もっとよくするには?と考えた。すごくいっぱい考えた。今すごく抽象画はイイと思う。悩んだかいたがあった。(S.M)
- ・建物の窓を全部消した。消した理由は、「自分の気持ちが何か違う」と言ったから。最初はでもやりたいことはほかにもあるし、消さないでそのままにしようかなと思ったけど、自分に言い訳をつけて逃げているだけだった気がした。だから消した。
<中略>今まで先生が思い切っているいろいろやってみると何かが変わるかもって言ってたけど、どうやって思い切ったらいいのかわからないし…、わからない!と思ってたけど、その時わかった気がする。(N.A)

- ・最初はお先真っ暗だったけど、リアルな絵ではなく自分がもしこういう背景だったらなと思ったことを描いてみるとすごく自分の絵が変わった!色も絵だからできることでより良いものになった気がする!あの時の自分は何でこんな絵になったんだ?と思う。でももしかするとあの最初の絵があったからこそ今の絵があるんじゃないかと思っている。そして今では、あの絵は自分だけの絵の世界という感じで満足している。(M.T)
- ・たった今卒業制作が終わりました。考えてみると、最初に画布においてしまった色にとらわれずずっと悩んで、それが何日も続いてしまい、苦しい思いをしてきました。でも、あの苦しきから逃げずに少しずつ、一步一步成長できたことは我ながら誇りに思います。最終的に自分の思うような絵が描けて本当によかったです。(T.G)

この卒業制作とともに1年間に及ぶ「無言館の時間」を終えることとなった。画学生の作品を「みる」こと、そして画布に「描く」ことをとおして子どもたちは何を学んだのか。以下は最後の授業のふりかえりにおいて、より多くの共感を得た感想である。

- ・「私は描きたいものから迷った。そして、制作も楽しいことよりも辛いことの方が多かった。もう一度卒業制作をしようと言われれば今はやりたくない。でも画学生は自分が生きた証としてしっかり描きたいものがあり、出征直前という過酷な状況の中でも画布と向き合ったことは本当にすごい。」(A.I)
- ・「自分は好きなことがある。でも画学生にとっての絵と同じくらい好きかと聞かれたら自信がない。」(K.S)
- ・「こんなにも描くことが大好きで、愛する人や風景があって、画家になる夢をもつ画学生の命を奪った戦争は許せない。」(N.A)

以上の感想からわかることは、子どもたちが「原風景」や「大切なもの」を「描く」ことをとおしてみえてきた自分自身と画学生を比較しているということである。そして、悩み葛藤してきた自身の姿から画学生の故郷の風景や愛する人々への思いや絵に対する情熱に考えを巡らせ、その結果、「だから戦争は許せない」という主張にまでたどり着いている。この事実は、何よりも遠い過去に起きた戦争と自分自身との距離が縮まった証でもある。平和学習の現代的な課題を思い返した時、画学生の作品を「みる」、そして画学生と同じように「描く」ことをとおして、戦争や平和についてそれまで「みえなかったものをみる力」を育んできたという点で、平和学習における美術教育の有用性を見出したといえるのではないだろうか。

4. 卒業後の余韻



神奈川県立近代美術館にて（2009年5月）

（1）中学2年生

教育は何をもって成果といえるのだろうか。教師は限られた時間の中で子どもの成長を見とらなければならないため、教育の成果を即時的なものでも判断しがちであるが、「生きる力」という意味での成果は、時間の経過の中で見とるものである。平和教育における美術教育の有用性を訴えるのであれば、その曖昧さ故に長い目で見守り、子どもの将来に残る実感の一つ一つひろうことで説得力をもつものとする。筆者は、子どもたちが小学校卒業後も年に1、2回程度ではあるが、塾や部活の合間を縫って参加する半数（19名／39名）の子とともに美術館で活動している。日々受験競争を背景にした学習に追われる中学生にとって、美術館の時間は、作品と対峙する「ひとりの時間」とともに、不信感を前提としない互いを結びつける「対話の時間」がかけがえのないものとなっているようである。

以下は中学2年生になった子どもたちに、「あらためて鑑賞とは？美術館とは？無言館とは？」という問いについて自由記述させたものである。

- ・（中学2年生の今）人には絶対に言えないストレスを抱えているけれどこのメンバーで鑑賞するとそんなことはふっとんでしまいます。だから鑑賞は私の心を支えてくれていると感じています。（R.H）
- ・鑑賞は私にとってもう一度自分をみなおせることだと思う。今は勉強で大変だったり、習い事で忙しかったり、ずっと静かな時間を過ごすことがない。美術館は外の雰囲気とはちがいで、とても静かで少し緊張感があるところです。だから自分が素直になれるんだと思う。私はこの2つ（鑑賞と美術館）をとおして自分に自信を持つことができ、今では発言も増えてきました。今はガチガチの生活の中にいるけれど、自分の中にはこの3年でやったことがたまたま残っています。（S.K）
- ・鑑賞をつづけて思ったこと。もっと心のおくの方にしまわれている自分に気づく。それだけかもしれない。でも今、自分が

どうなっているか、とかどう思っている、とかを知ることによって正体不明の疲れだったものが楽になるかもしれない。絵は「見る」んじゃない。「みる」んだ。自分を「みる」。世界を「みる」。絵を「みる」…。小さな言葉の違いでも違っている。そんなうまく説明できるものじゃない。でも大きな違いはこれだ。（K.S）

・他人の思いを読み取るにはまず自分がわからないといけないと思う。だから自分を見つめ、自分を知ることが鑑賞の価値だと思う。（A.N）

・私にとっての「鑑賞」の価値。「鑑賞」をとおして見えてきた絵の裏側。その絵に込められた思い。また、「鑑賞」をとおして見えてきた自分の姿。その1つ1つを知れたこと。知ることができること。私にとっての「美術館」の価値。なにかもやもやした時、自分をおちつかせることができる場所。静かな時間が流れている場所。なごめる場所。自分の存在を知れる場所。ひとりになれる場所。世界が違って見える場所。お気に入りの場所。「美術館」の価値＝「自分」を知る場所（S.K）

・1つ確実なこと。それは3年間の活動の中でとても大切なものから目をそらそうとしていること。今もそう。絶対に正直じゃない。＜中略＞3年間っていったい何かな。今わかりそう。でもわかんない。この心境を楽しく、おもしろく感じられたらきつとわかる。もっと時間をかけて、何年もかけてわかるようになった自分を見たい。もっと美術館の活動を続けたい。（M.K）

・美術館は、うーん、なんて言ってもいいかわからないけど一言で言うところ「いつでも行ける場所」。逃げたい時、モヤモヤした時、何でもない時など。この3年間で自分の気持ちを自分が受けとめてあげられるようになった。こんな感じ。（A.I）

以上の言葉からみえてくることは、鑑賞を図工の授業の中だけの一過性のものと捉えていないことである。小学生の頃、描かれているものを「みる」ことから始めた鑑賞学習は、物語を「想像する」こと、描かれているものと画学生や時代の背景を照合して作品を「解釈する」こと、そして作品をとおして「自分自身をみる」ことまで深化してきた。「図工の時間」として始まった鑑賞はいつしか「図工の時間」でなくなり、そして中学生になっても鑑賞や美術館を生活していく上で大切なものとして捉えていることも読み取れる。また、無言館についても「戦争」という括りではなく、他の美術館同様自分自身の「生（せい）」をみつめる場として整理している。作品をとおして自分自身を「みる」ことは、時にネガティブな自分がみえることもあり、だからこそ将来成長した自分を実感するためにも美術館で活動を続けたいと願う子もいる。いずれにせよ、鑑賞や美術館が彼らの生活に必要なものとなっている事実は、教育の一つの成果といえるのではないだ

ろうか。

(2) 中学3年生



無言館訪問の様子 (2010年9月)

中学3年生になった子どもたちは、映画撮影を兼ねて再び無言館を訪問する機会を得た。高校受験を控えた大切な時期であったが、小学校卒業後も美術館の活動に参加してきた19名全員が参加を希望した。「無言館だけは行きたい」、「塾はあるけど、無言館だから親も許してくれた」など、子どもたちの中に今なお残る無言館への思いを確かめることができた。事前の打ち合わせでは、3年前の「無言館の時間」についてふりかえるとともに、複製画を鑑賞した。数年ぶりにみる作品に懐かしさが蘇るも、話題は自分たちの日常生活や同世代の「戦争」や「生死」に関する意識にまで広がった。以下は対話後、感想を自由記述させたものである。

・中学校の社会の授業で戦争のビデオを観ました。観終わった時、男子から「おもしろかったな」「俺も戦争したい」という言葉が出てきました。私は小学校の時から戦争の勉強をしてきて、祖父やおじも戦争に行っているため、戦争に対する思いが人一倍あったのかもしれませんが、すごく悲しくて、その男子にバカにされるのも目に見えていましたが怒りました。するとやっぱり、「は？お前何でマジになってるわけ？ハハッ！」という返事。その言葉に返す気も失せて悲しくて悲しくて。

<中略>戦争を知っている人がいなくなってしまった世の中が怖くて仕方ありません。(N.A)

・(N.Aの話から)「はっ!!」と私も自分のクラスでヘラヘラしていた人達が頭に浮かびゾッとした。「(近い将来に戦争は)ありえる、全然ありえる」と思った。本当にこんな人達が今たくさんいるんだ!!こんな人達が大人になったらと真剣に考えた。正直どうしたらいいのかははっきり言えない。(A.I)

・私は無言館の学習が中学3年生になった今も生きることがあると、思うようになりました。それは画学生が絵に対してもう一つの生命(いのち)をふきこんで、身体の命がなくなっても生き続けているということから考えるようになったのですが、あの自由でなかった時代に生き続けたいという願いを込めて、絵を描いていたので、自由な時代だからこそ自分は今の命を大切にしていきたいと思い、「死にたい」や「死ね」という言葉はどんなにつらくても言わないようにしました。しかし、学校では友達がすぐにそういった言葉を使います。それを聞くとてもつらくなります。中学生同士が親に対して不満を持ち、お互いの親を殺す計画を立てたという事件があった時、その同級生は「不満を聞いてはいたけど、本当にするとは思わなかった」と話しています。その話を聞いて、言葉には力があるのだと思いました。言葉は人の心に残り、消せないのです。中途半端な気持ちで「死にたい」「死ね」といった言葉は口に出してはいけないのだと思います。それはあの時代に生きたくても生きられなかった画学生に対してもとても失礼だと思うからです。(N.A)

・戦争というのは今起こるとか全く実感がないないけれど(平和ボケ)、いつ起こるかかわからないという危機感を持つことが大切ではないかと思います。どういうきっかけで始まってしまいか分らないけれど、その予兆は絶対にあると思います。その予兆に気付けるか、気付けないかで社会は変わってしまいます。例えば、みんなが気付いたら、平和で仲良く暮らしているように努力するようになると思うし、自分の意見も持てるようになると思います。けれど、気付けないと、まわりを見る力がなくなり、自分の意見を持たずに流されてしまうような人になってしまうのではないかと思います。(S.E)

・今日は久しぶりに本音を言えた気がした。中学ではけっこう自分を「抑えぎみ」だったので、今日話せて自分のエンジンがかかったような気がする。戦争はどんな理由で起こるかかわからないし、その原因は日常の中に転がっている可能性もなきにしもあらず。あげ足を取られても自分の意見を通す力って大切だと思うが、そもそもあげ足的な発言ばかりする奴の方が問題ではないかとも思う。どんなことでも「向き合って考える」ってすごく大切な、と強く感じた。うちの学校でも考えが甘く、すぐ文句を言う人はいくらでもいるし、それに流されてすぐ意見の勢力が変わることもある。軽はずみに流されない(ブレない)力、自分の意見が本当に正しいか見直す力、とかそういう力も大切だと思った。(T.S)

・今日思ったこと。今までやってきたことと同じだから、そこまで思うこともないのかもしれない。ただ最近、言われたことを頭の中で具現化する力がついてきている気がして、今戦争が起きたらとか想像して、おなか痛くなった。できればずっと平和で、おだやかな、いわゆる「日常」を過ごしたいと切

に願うけれど、いつの時代でも「日常」というものはコロコロ変わるし、人によってもまったく違う。だから今、この時の自分の「日常」が平和で穏やかであればいいな。まあ、多少もの足りなくなるかもしれないけど、それってとても幸せなことだと思う。歯の噛みあわせが悪くて、頭が痛くなることに悩まされたり、勉強するフリをして絵を描いているお兄ちゃんを見て呆れたり、友達とゲームをして笑ったり、ムカついたり。とても平和で穏やかで幸せ。戦争はコレを赤黒く塗り替えてしまうからとても嫌なんだ。今のこの瞬間が、こわれなければ、塗り替えられなければいい。それで満足だ。(M.K)

・名画は作者が明確な意図をもって描いていると思う。つまり、それを伝えようと、技術（色や筆遣い、構図など）を駆使し、計算して描いている。だから鑑賞者は一つ一つの要素からいろいろな意味を想像しやすく、作品や作者について理解することができる。一方、無言館の画学生は自分の死と向き合うことで、自分にとって一番大切なものを、意図は持たず、「素直」に描いているのだと思う。松本竣介だって、自分が出征して死ぬことが分かっていたら、「立てる像」ではなく、もっと素直に描きたいものを描いたかもしれない。(T.S)

小学校を卒業して3年が経過した現在、子どもたちは自身の日常生活をみつめ、「戦争」を遠い過去のものではなく、より身近なものとして捉えていることがわかる。そして、戦争の火種は身近な生活の中にも潜んでおり、自分の考えをもち発信することの必要性や、あたりまえの「日常」を過ごせることが幸せであることを再認識している子もいる。また美術の視点で戦没画学生の作品と、いわゆる名画と言われる作品との質の違いについて述べた子もいた。戦没画学生の作品鑑賞は、時代背景や画学生の背負った運命なしには語れない。したがって、純粋に美術作品として分析したり、批評したりする鑑賞に耐えうるかは疑問の余地がある。しかし背景に流されることなく、客観的に作品の質を分析できたことは、戦没画学生の作品鑑賞が美術教育として成立したといえるのではないだろうか。

2010年9月、子どもたちは無言館を訪問し、窪島氏と再会した。館内で一つひとつの作品と対峙する子どもたちの様子は、3年前とは明らかに異なっていた。「3年前は作品の背景が重くて絵よりも背景をみていたのかもしれない。でも今日は重い背景抜きに、純粋にこの絵は素敵だなとか、この絵がほしいなとか思った」(A.N) という意見に多くの子が共感したように、子どもたちは画学生の重い背景を知りながらも、一人の画家の作品として純粋に鑑賞できたようである。子どもたちの「みる」は、いつしか美術の枠を越え、今

まで気づかなかった自分の姿や日常の世界を「みる」に変容してきたが、背景なしでは語れない無言館において純粋に作品がもつ「美」に共鳴している姿は興味深かった。今後はそれぞれの感じた「美」を丁寧に分析することがまた「それまでにみえなかった自分をみる」ことにつながるであろう。

5. おわりに

現在、学校教育の中では、依然として「図工・美術」は教科の枠の中だけの学びになりがちであり、また子どもにとっては受験に関係ないという意味で主要教科でなく、結果として得意不得意だけの問題となる傾向が強い。美術を愛好する中高生や大学生、社会人の多くは、恐らく子どもの頃、「図工・美術」が得意だったのではないだろうか。その得意とする人々が美術教育の必要性を訴えるだけではいっこうに裾野は広がっていかない。大切なのは得意不得意という意識をもつ前に、誰もが「だから図工・美術は必要だ」と実感を伴って言語化できることである。「図工・美術」を入りに、誰にも共通する「生（せい）」や「平和」に関する領域にまでふれることができた時、日常生活や社会について考える一つの方法が「図工・美術」であるという認識をもつのではないだろうか。美術教育が単なるよい絵や工作の手法と勘違いされ、表現や鑑賞の向こうにある人間にとっての普遍的な価値が広く共有されない現下においては、時間数が削減されても当然である。今一度、我々にとって必要な美術教育とは何かを問い直した時、戦没画学生慰霊美術館「無言館」は進むべき一つの道を示してくれている。

中学生とは5年後、「無言館の成人式」において再会を約束している。戦没画学生と同じ年頃になった20歳の彼らが「生」や「平和」について何を「みる」のか、そして一成人として自分の「生」をどのように「表現」していこうと決意するのか、楽しみにしたい。

